

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	母よ子の歎きは深し（三行詩）
Author(s)	古賀，薄明
Citation	龍南會雜誌， 1 7 1： 7 9 - 8 1
Issue date	1919-06-20
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6569
Right	

詩歌欄

母よ子の歎きは深し

——三行詩—— 古賀 薄明

献ぐる言葉

久方の天が日のもと

寒きに着せ餓れて食ましめ

吾がためにまさきくあれさ

かにかくに成長ゆくわれの

今日の日を吾れにめぐみし

生みの子は天つ大空

あはれ吾が日に日に老ひて

ふるさとの母まそのはは

□

吾を生みて吾をいつくしみ

老ゆる身のその日忘れつ

ひたすらに祈りをしつ

笑めば笑み泣けば歎きて

垂乳根の母よそのはは

仰ぎつつ涙わりなし

白玉のいのちうつらふ

汝は愛しも

ははよ

冬の涙ぐましき黄昏に

汝が胸に寝て泣き眠いりせむ

ははよ

この冬のたそがれにしみじもと

わが淋しさを告げましものを

ははよ

なにげなく見上げし空に黄昏の

雲はまつかく燃ゆるたりけり

ははよ

いかにわれ泣けばさてこのさびしさは

つきはてざらむ汝が生みし子の

ははよ

生くることはさびし汝が子は

さびしうてならず街を急げり

ははよ

わが淋しき性をかなしみつ

落日まつかき空を仰ふげり

□
ははよ

なにげなく見上げし空にたそがれの
かそけき光り消ゆゆくを見たり

□
ははよ

冬の寂しき黄昏は汝も遠く幼き日
泣きしことありしかわれのごとくも

□
ははよ

なれが生みし子は人しらぬ
この歎かひをむねにいだきぬ

□
ははよ

幼なき日汝が胸に寝て子守唄
ききし日のなごて悲しかるらむ

□
ははよ

わがさびしき涙ながすとき
汝がやさしきむねをもとめぬ

□
失ひしもののつひにかへらぬ

さびしさにこのさびしさに
生きんとするか

□
大海の離れ小島に

捨てられし嬰子のごとき
ころおぼれぬ

□
かすかにも

ころのおくに捨てられし
嬰子の泣く音きこゆるごとし

□
別れ来てかへりみすれば

遠ほき日のなづかしくて
なみだせきあわす

□
あかあかと

落日にもゆるもみちばの
さびしき家に黙だしけるかな

ふと見あげし空に
氷はれる三日月の
影ほそばそし冬のたそがれ

(一九一八、十二)

龍田歌集

古賀 薄明

そこばくのわが歌の中よりここに五十首を抄し友なる親しき人々にねくる。

おとづれ ー十二首を山根浩氏にー

さよふけの路をたどりてわが來ればひそかにさびしふるさとのひと

さよふけの路を歸れば雪空に山火事の火のはるかなりけり

疲れたるころいだきて臥する夜の外の面に雪の積むけはひする

あはれこの讀書ののちのコーヒーの熱つきにころおちつきて寝ぬ

さよふけて寝ねんとすればさらさら窓の戸打ちて雪降りいでぬ
さびしさを告げましものと出で立ちし路邊の草に雪は降りつつ

雪空の暮れの早きにうつうつと床しきのべて臥しにけるかな

冬の日のうすらに照ればはるかなる山脈の雪ががやきにけり

竹やぶの竹のほさにさらさらと白雪降るを見つつわしかな

ひつそりと雪降るなかに竹やぶの竹は音さへたてざりにけり

うつうつとひとり籠れる淋ぶし家の窓の戸叩き雪は降りつつ

薄日さすふもとの家にひとりゐてものを思ふと告げましものを

萌は出づる草 ー五首ー

火の國の春さも來れば乙女らは野に離り來て若菜摘らしも

春されば阿蘇の山脈遠は遠はに霞棚曳き雪解すら